

見本などを納めた第二参考館もこの辺りにあったと推定される。陶磁器づくりの機能がひとつの谷間に集中していたわけである。慶雲閣／里山は焼物などの製造工場としてだけでなく、料亭としても、華やかな社交の場としても使われた。そのため彼はかつて明治天皇が投宿されたという名建築「慶雲閣」を、わざわざ藤沢からこの地へ移築し迎賓館としたのである。「春風万里荘」を手放してからは、もっぱらここが魯山人の住居となった。

慶雲閣の前には大きな蓮池があり、大好きなタニシなども獲れ、いつも来客が絶えなかったという。奥には第一参考館があり、二つの「参考館」には一万点を越す陶磁器類がおさめられていた。だが残念なことに、それらをいまに伝えるのは敷地の周辺に散見される焼物の断片のみようだ。

「料亭・福田家 夏の茶懐石」は、二十一名の皆さんにご参加いただいた。当日飛び込みの方などもありつらつらとして、当初の定員数はどこへやら。いざさか面喰わされた。「葵の間」には大きな屏風が立てられ、さまざまの器も並べられた。度外れて大きな組板皿と染付けのやや大

振りな葡萄酒文鉢が、私にはひとさわり印象深かった。料理評論家ではないので、茶懐石の中身についてご報告はできないが、お茶碗から盃までいろいろな種類の雅陶に、さまざまなお料理が盛って供される。これが「おもてなしの器」たる所以かと、いまさらながらに感服しきり。お料理の後は「星ヶ岡茶寮」のあった場所まで足を伸ばし、みんなで大正末の華やいだ雰囲気にはしゃし想いを馳せられた。まさに至福のいつときであった。

関連サイト：URL <http://www.fart-office.com>

芸術士のいる保育所——子どもと電車のプロジェクト「コトデン×コドモテン」を例に——

おたえみ 太田絵美子 (芸術士)

香川県には、高松からこんび

らさんを繋ぐ、ことごとくという愛称で親しまれているローカル鉄道、高松琴平電気鉄道(株)があります。のんびり走るその短い車両にはなんと愛嬌があります。

そんな地元の鉄道駅舎を利用して、保育所の子どもたちの作品を展示する「コトデン×コドモテン」が夏休みの始まりに合わせてスタートしました。ことごとく百年を祝う巨大な横断幕、透明な素材に描いた涼しげなドローイング、カラーコーンや小石、竹ぼうきでできたへんてこなオブジェ、子どもことごとく拾い集めた「こどもしんぶん」窓をステンドグラスに見立てた作品など、十三の駅が色とりどりの作品で飾られました。切符きりや車内アナウンス、電車ごっこで車両に乗るパフォーマン

スも行われました。また、スタンプリューも同時に実施され展示駅それぞれにオリジナルスタンプが設置されています。もちろん、スタンプの原画は子どもが描いたイラストです。展示は好評で、夏休みの終わりで会期が延長されることとなりました。

高松市では、保育所にアーティストを派遣する「芸術士派遣事業」が二〇〇九年秋より始ま

りました。現在市内二十五箇所の保育所(園)で展開するこの事業を請け負っているのは、香川県高松市に本拠を置く特定非営利活動法人アーキペラゴという団体で、初年度は緊急雇用創出基金事業、翌年度からはふるさと雇用再生特別基金事業を活用し実施しています。多くの子どもたちが共に過ごす保育所を舞台に、子どもたちの感性と創造力の芽を見つめ育む環境を整備すべく、アートを通じた活動経験を有する「芸術士」を配属しています。芸術士は、週一、三日ペースで保育所(園)に派遣され、単発のワークショップの実施ではなく、アーティストが年間を通して保育に参加するという試みです。

活動報告展、冊子の発行、瀬戸内国際芸術祭うみあかりプロジェクトへの参加、そして今年二〇一一年七月には高松琴平電



子どもたちの自由な発想を活かす、様々な企画が行われている

「美術の窓」に掲載されてから……

あべな おあき 阿部直昭 (行動美術協会会員)

ており、大人の求める結果が子どもたちにとっての正解とは限らないのです。子どもたちは無自覚に多様な表現手段を習得します。歌うこと、踊ること、絵を描くこと、それらの創造力は無限に広がります。そもそも子どもたちが何かを表現したいという欲求の源は、自分も社会の一員であるということを他者に認めてもらいたい感情にあるのでしょう。芸術士は、そんな子どもたちの可能性を狭めることなく、子どもたちの創造力を最大限に引き出す環境づくりに努めています。人が変われば、街が変わり、社会が変わり、世界が変わる。

高松市の小さな決意と行動。それらが生む小さな変化が、世界の更なる輝きにつながることを祈って、私たちはこのプロジェクトを続けていきます。

以前、私が描いてきた麦シリーズのマチエール作りを美術の窓誌四月号に載せなかつたことがあり、作品の準備中だった。私の麦シリーズとは、約十五年前に取り組んでいた油彩画シリーズである。私は、大分の宇佐で交通事故を起こし当時小学生の男の子を轢いてしまった事がある。道路に倒れている子どもの顔からは真つ赤な血が噴き出し、駆けつけた親戚の男性は、「この子の親はこの子を一番誇りに思っている」と育っている。死んだらおまえを殺す」と私の胸ぐらをつかんで叫んだ。その子はその後元気に回復し安心した。しかし同じ時期、私の妻の母親が癌で亡くなった。義母には生きていた時にあれもこれももう少ししてあげればと後悔していた。

そんな事があったその年、久留米の石橋美術館の青木繁記念大賞展に出品した。内心うまく描けたと思ひ、心の中では、何

かからの賞が少なくとも入選はするだろうと確信していた。しかし、発表の通知には、落選の文字が……

この日だけは、誰にも会いたくないと強く思いながらも作品の引き取りは自分のトラックで行った。作品を積んで自宅に帰る時、車窓から見えたのは、久留米の郊外の二月の田園風景だった。畑には麦が植えてあり農家の人が機械で麦の芽を踏んでいる。運転しながらその風景を見てみると、小さいときに父から聞いた「麦は寒くて芽が出たときに踏まれて初めて丈夫に大きく育つ」の言葉を思い出した。今の自分はいろんな事がうまくいかずどん底だな、まるで踏まれているあの麦のようだなと思

った。半年後、当時、中学の教員をしていた私は、家庭訪問のため、麦畑の見える堤防を運転していた。夕陽が輝き心地よい風が吹いていた。その光景はまるで、「となりのトトロ」のネコバスから見たような、麦が金色に輝き風の道が出来ているようでもあった。

あの時、久留米で見た麦の芽もこんなふうに成長してはうな……と感動した。そこでこれが絵に出来ないかなあと思ひ、車を止め二、三本麦の穂を失敬

し、アトリエで筆を走らせた。何とか絵に出来そうだと実感した。

次の年、青木繁記念大賞展でわだつみ賞を受賞した。その翌年、別府絵画大賞展で大賞を受賞し、さらに、日動画廊の昭和会賞展で昭和会賞を受賞した。これまで思っていた麦のイメージが、花開いたときだった。私の経験の中で、不遇と思っていたことがエネルギーになり、希望に変わった。

二〇一一年三月十一日のあの津波の映像を見た時、映画のシーンを観ているような、いや現実の世界なのかどうか分からなくなり、頭の中が非現実のイメージになったような気がする。この感じは、以前にも一度経験がある。それは、一九九五年の一月の阪神淡路大震災の時である。テレビの中継で、ヘリコプターから撮った神戸の街は火災の煙が幾筋も立ち昇っていた。あの時と同じだ。



「大地からの恵み」(第6回別府現代美術展大賞作品) 別府市美術館蔵

美術の窓四月号が発売されたあと、しばらくして神戸に住むある人から連絡が入った。この人は、神戸、関西地区でいろんな方面に影響力のある人だった。「あなたの作品(麦)を見て神戸が震災から復興する姿を連想した。できればあなたの作品を東北震災の復興のためにたくさんの人に観てもらいたい」と大きな建物の中に展示出来るように計らってくれた。結局、神戸のホテルオークラ、ANAクラウンプラザホテル、ハーバランド、明石がんセンター、北野クラブなど神戸地区十五ヶ所に五〇号から一三〇号までの私の作品十五点を展示し、多くの人々に観てもらえるようになった。

今回の震災の後、私自身が被災された方々に何が出来るとか常々思っていた。自分が描いた作品で少しでも観た人たちが頑張ろうという気持ちになっていただければ、これ以上の作家冥利に尽きる事はないと思ふ。

気鉄道(株)とのタイアップ企画など、子どもたちと地域を繋ぐ役割も担っています。子どもたちが社会の中で価値ある存在であることを示し、子どもたちが創る未来の社会を垣間見せ、そしてそれらが社会の財産となることを願っています。

感性と創造性の可能性を知り、それを体現している「芸術士」たちは、地元高松を拠点に活動するアーティストです。彼らの専門は様々で、絵画、彫刻、漆芸、染織、身体表現、音、光、言葉など、あらゆるアプローチで子どもたちに語りかけます。また、芸術士は、結果ではなく過程を大切にします。竹をテーマにした楽器づくりや遊具づくりのプロジェクト、保育所へ大量の木材を持ち込んで小屋を建てるプロジェクト、芸術士で結成した台詞の無い人形劇公演など、めまぐるしく移行していく子どもたちの関心のところどころに興味の種を蒔くように、様々な企画が展開しています。プロジェクトは、進むに従い、更にそれぞれの子どもの興味へと枝分かれしていきます。芸術士自身も、その化学反応を楽しみながらプロジェクトを進めています。子どもたちは大人の予測を遥かに超える創造力を持つ